**第10回　「あなたの『おいしい記憶』をおしえてください。」コンテスト**

①応募する部 Ⓐ一般

②題 どら焼きの餡子

③氏名（ふりがな） 小林　篤来　（こばやし　あつき）

④年齢 66歳

⑤性別 男

⑥郵便番号 169-0075

⑦住所 東京都新宿区高田馬場四丁目29-39

⑧電話番号 03-5386-5086

⑨何を見て応募したか Ⓓその他（ホームページ）\*

\*<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/oishiikioku/>

どら焼きの餡子

子どもの頃、餡子が苦手だった。昭和三十年代の餡子は、今より甘さが強かったような気がする。

最中の皮だけ食べて中身の餡子は、祖母にあげた。明治三十六年生れの祖母は甘いものが好きで、よろこんでその餡子を食べていたように思う。わたしの記憶にある最中の餡子は、水分が少なく、そのうえ水飴を含有しているようで、粘着性が強かったような気がする。そのため、皮をきれいに剥離する作業は慎重さを必要とした。皮を一部の損壊もなしにきれいに剥がすことは、ほぼ不可能であり、したがって、皮を剥がされた餡子は、ところどころに皮が付着しているのが常だった。そのような餡子のかたまりは、どう見てもおいしそうには見えないシロモノだった。しかし、祖母はそれをおいしそうに食べていた。

どら焼きも皮だけ食べて、餡子は祖母にあげた。ホットケーキが簡単に家庭で作れる時代ではなかった。喫茶店で食べたホットケーキは、ため息が出るほどおいしかった。どら焼きの皮は、それに優るとも劣らない魅力的な存在である。是が非でも、餡子などなしに食べたいのである。ありがたいことに、どら焼きの皮は剥離が容易であった。その均一に焼け色のついた柔らかそうな皮は、完全な形を保ったまま、どら焼き一個から二枚もゲットできるのである。これは嬉しい。食べればまさに至福の時である。

あれから六十年ほどたった今では、わたしは最中であれどら焼きであれ、餡子もおいしくいただいている。血糖値を気にしながらではあるが。昔とくらべ甘さがおさえられているので、餡子もおいしい。最中もどら焼きも、皮だけ食べるなどという邪道なことはしない。

先日、長女が孫を連れて遊びに来た。五歳の女の子である。どら焼きがあったので、孫にあげた。さっそく孫は、どら焼きをひと口かじった。小さな口でかじり取られたどら焼きの断面は、餡子までとどいていない。断面から餡子がのぞいている。すると孫は、そこから皮を剥がしはじめた。皮はペロッと剥がれ、孫は嬉々として皮を食べている。長女が、「餡子はどうするの？」と訊くと、「おかあさんにあげる」と言った。「餡子だけなんてヤダー」と長女は、餡子を食べようとしない。孫は、小さな悪戯が露見したときのように照れ笑いを見せた。

わたしは、「それじゃあ、オジイサマにあげる」と孫から振られることを想定して、その時の対処を瞬時に検討した。食べるべきか、食べざるべきか。しかし、孫はわたしに振ってこなかった。孫も餡子だけを誰かに押し付けることを心苦しく思っているようだ。そのくらいの空気は、読めるようになったのだ。皮を剥がされた餡子は、お皿に捨て置かれたままになっている。わたしも血糖値の上昇リスクを考えれば、餡子だけを食べたいとは思わない。

祖母は、わたしが食べ残した餡子をどのような気持ちで食べていたのだろうか。皮も食べたかったであろうことは、想像に難くない。とはいえ、孫の食べ残した餡子だからこそ、よろこんで食べていたのではないだろうか。やはり、おいしかったに違いない。そういう祖母だったように思う。

以上